



行動分析の手引き

人間を見る力をつけるための資料 - 2015年8月29日



作成：佐藤直暁

はじめに

本書は、『体癡論』について解説したものである。人間行動を分析するさいに手引として活用していただければと考える。

簡単に体癡論とそれを創りあげた人物について説明しておこう。

体つきや動作の特徴が似ている人間は、性格も似ている——このような感覚的なアイデアを、整体現場での人間観察を通じて、実証的に精緻な理論としてまとめあげたのが野口晴哉である。彼はその理論を『体癡論』と名付けた。

社団法人整体協会の創設者である野口晴哉は、明治44年に東京に生まれ、昭和51年に没した。

野口は、子供のころから特異な才能を発揮し、17歳ですでに自分の健康道場をもち、天才的な療術家とうたわれた。

戦後は病氣治療を捨て、昭和31年文部省体育局より認可を受けて「社団法人整体協会」を設立し、整体法に立脚した体育的活動に専念するようになる。その野口が晩年まで研究を続けていたのが体癡論である。

体癡論についてまったく知識のない方のために、簡単にそのポイントを記しておこう。ここでは野口晴哉著『整体入門』（ちくま文庫）から体癡論を簡単に紹介してみる。

人間の身体運動は一人ひとり異なっている。同じ荷物をもつにしても、顔を歪める人、肩に力を集める人、腰へ力を集める人など、体の使い方は人により様々である。

風邪をひいても、同じ経過をたどるわけではない。咳がいつまでも残る人、下痢をする人、高い熱の出る人、低い熱が続く人などとみな違う。そして、その経過をいつも繰り返す。

食事をするのでも、食物の好みは人により異なるし、食べ方も様々である。

こうなるのは、個人の身体運動の特異性がもたらすためである。身体運動の特異性が習性的に繰り返されることによって、個人の様々な特性が表れるのである。

野口晴哉は、この個人特有の身体運動を、体の癖すなわち『体癖』と名づけた。野口は人間の特徴である立姿姿勢における動作をつかまえることが体癖を研究するうえで重要だと考えた。

立姿運動には、前後運動、左右運動、捻る運動（捻転運動）、上下運動、さらに伸び縮みの運動がある、と野口は説明する。

それに加えて、運動自体の早さ、つまり遅速とか敏鈍というような動きがあり、この6種類の動作が組み合わさって、人間の立姿運動が形成されるというのである。

そこで、この要素をもとに、ある人の動作がどの運動傾向によって特徴づけられているかを観察していくことが考えられるようになった。その結果、野口は体癖を12種類に分類した。

- ・上下型（1種、2種）
- ・左右型（3種、4種）
- ・前後型（5種、6種）
- ・捻れ型（7種、8種）
- ・開閉型（9種、10種）
- ・遅速型（11種、12種）

ところで、立姿姿勢というのは腰骨（腰椎）との関係が深いのである。人間が他の哺乳類と大きく違うのは直立歩行をすることである。その結果、他の哺乳類と違った特徴がいろいろ生じている。

特に重要なのが、腰のそりである。犬や馬などの四つ足動物には、人間の腰にあるようなカーブがない。この腰のそりがあるために、人間は直立できるわけだ。しかし、この腰で上半身の重みを受け止めることから、腰の負担が大きくなり、腰痛が起きる。

人間には5つの腰椎があり、上から腰椎1番、腰椎2番と数え、いちばん下が腰椎5番となっている。整体では、重心は腰椎3番できちんと受け止めるのがよいとされている。しかし、実際の人間はそれが微妙にずれている。しかも人によってずれ方が違う。

どの腰椎に重心がかかりやすいかで、運動特性や姿勢、さらには性格まで異なることになるのだが、このことが体癖と密接にかかわってくるのである。

体癖と腰椎の関係は下のようになっている。体癖を学ぶにあたっては、この関連を覚えておくのがよいだろう。

上下型：腰椎番

毀誉褒貶に敏感なタイプ。世間の評判に敏感に反応し、名誉を追い求める傾向が強い。

左右型：腰椎番

好き嫌いで行動する感情タイプ。物事をすべて好き嫌いの感情で決める傾向がある。

前後型：腰椎番

利害得失に敏感なタイプ。利害や損得勘定に基づいて行動する。

捻れ型：腰椎番

勝ち負けに敏感なタイプ。負けず嫌いで、何事にも競争意識を持ち、勝ち負けにこだわる。闘争的な傾向が強い。

開閉型：腰椎番

愛憎の感情に敏感なタイプ。愛情の感情が常に行動の基準となる。

本書ではこれらの体癖を紹介していく。なお、遅速型（11種、12種）については、やや特殊であり、一般的な体癖の理解には必要ないと考え割愛した。

体癖各論

体癖論の各論に入る前に、その勉強法について、あらかじめ少し触れておきたい。体癖論の詳細については、野口晴哉『体癖一』、『体癖二』（いずれも全生社）にまとめてられているので、そちらを参考にされるとよい。

ただ、実際問題として、本を読むだけで体癖を理解するのは意外に難しいという気が私はしている。

体癖関連の文章を読んで、読者は5種なら5種はこんな感じだろうとイメージするだろう。ところが、これが案外的はずれになることが多いのである。

だいたいイメージというのは、文章のある一部分だけを取り上げて、そんなものだろうという思い込みで形成されることが多い。そのため意外に当てにならないのである。

最近では体癡論がいろいろなところで紹介され、以前に比べてずいぶん広まってきたように思うが、そうなるにつれ、思い込みが一人歩きするのではないかと、私はやや危惧している。

体癡論は全体の観察技術と密接な関係があり、確たる整体技術をベースに理解されるべきだと思う。イメージ先行で体癡論を展開していくと、思わぬ迷路に迷い込む危険がある。

体癡を学ぶなら、本当はワークショップのようなところで、専門家の指導のもと、人間を整体的に観察しながら勉強するのがいちばんよいと思う。本だけで理解しようとするのは危険ではないかというのが私の正直な感想である。

しかし、いまこの段階でそういうことを言ってもしかたがない。一般読者に整体技術や全体の観察技術について述べても、チンプンカンプンであろうから、そこは省略せざるをえない。できるだけ誤解のなきように体癡を理解していただくしかない。

本書では私自身がいろいろな機会を通じて学んだ内容をまとめてみた。体癡論を理解するためのとっかかり程度のものでしかないが、これを踏み台に各自研究を進めていただきたい。

1 上下型 1種

1種の体型

上下型は腰椎1番に重心がかかりやすいタイプである。腰椎1番は運動機能としては上方運動（伸びる運動）を支配し、臓器関係では神経を支配している。そこで、上下型にはこれらの影響が濃く見られるようになる。

上下型1種を理解するにあたっては、エネルギーが頭脳に集中するタイプであるというところから入るのがよいだろう。大脳昇華型である。

1種の体つきはというと、顔はがっしりとしているが上下に伸びていて面長である。顔もそうだが体全体も細長い感じである。背が高くほっそりして見えるが意外と骨太だ。

それから、1種の場合、首に特徴がある。首が長くて太い。特に緊張したとき、後頭部から胸椎5番までの背中が一直線になる。上胸部から首がまっすぐに伸びているように見える。

首と連動しているのだが、足首も非常に太い。西洋人、特にドイツ人の男性やフランス人の女性には多いとされる。

日本人の場合は、純粹の1種は少ない。男には少しいるが、女性は非常に少ない。代表的人物には志賀直哉、内田百閒《ひゃっけん》などがいる。

1種が文化人として特に活躍したのは明治の時代である。

1種の運動能力は他のタイプに比べてかなり見劣りする。活躍するスポーツ選手はまずいない。せいぜいマラソンくらいである。運動能力は基本的に乏しい。

1種は頭脳優位の人間なのだが、年をとるとさらに理路整然としてくる。もともと運動能力が劣っているわけだが、年をとって運動能力がさらに落ちると、ますます頭脳が勝ってくる。

1種の場合、年をとって耳が遠くなることはそれほど問題はないが、舌がもつれるとたいへんだ。彼らにとって言語機能はとても大事なのである。1種を元気にさせるには、とにかくしゃべらせることである。

1種の感受性

1種の感受性の特徴は、毀誉褒貶《きよほうへん》である。つまり、名誉に非常に敏感なのだ。彼らは世間の評判が気になってしかたない。

1種の料理人は、材料はどこそこの名産、塩は伯方、炭は備長炭、盛り皿は誰々の名品を使っているといった具合に、一流のものを示したがる。これも評判に弱いからなのだろう。自分の腕のことは忘れている。

おもしろいことに、毀誉褒貶に敏感なくせに、彼らは往々にしてそれを隠そうとする。本当は毀誉褒貶にうるさいくせに、それを気づかれまいと振るまう。

そこで、彼らに名誉や何かの賞を与えるときには、大義名分を提示する必要があるじてくる。何かするとき大義名分にうるさいのも、上下型の特性なのである。

同じようなことだが、上下型は目立つことが嫌いで、役職に就くことをいやがる。平等主義で役につきたがらない。また、質素なものに対するあこがれがあるように見える。

1種も2種もそうだが、彼らが政治家になると選挙活動を極端に嫌う。いくら世襲だといっても、こういう人が政治家になるのは本人にも有権者にも悲劇なのではないか。

抽象化癡

1種はだいたい頭脳優秀で、学者に多くみられる。頭脳特性としては、抽象化にすぐれている。

抽象化というのはこういうことである。

自分が幸せ→家族が幸せ→住んでいる地域住民が幸せ→国が幸せ→宇宙が幸せ

抽象化とは普遍性を求めることといえる。物事をどんどん抽象化していき、階層構造化し、上に、上にと向かっていくのである。

おもしろいことに、1種を上位概念に向かわせると、どんどん元気になる。抽象化癡を活用させると元気が出るのだ。

抽象化癡といえば、インド人（といっても、インドは多民族国家であるから、ある一部の民族なのであろうが）には、その傾向がたいへん強いようだ。

仏教史を振り返ると、釈迦の概念がどんどん抽象化されているのがわかる。はじめは釈迦の説く教えが崇拜されたわけだが、そのうち生身の釈迦ではなく、抽象化された理念としての釈迦がうみだされた。

さらに時代が進むと、釈迦でない毘盧遮那《びるしゃな》という超人的な仏《ぶつ》が宇宙の根底にいとされ、毘盧遮那のひとつの表れとして釈迦があるとされるようになった。このあたりは、インド人の抽象化好き性癡がよく表れている。

ゼロが発見されたのはインドだが、数学的才能が抽象化癡と無関係ではないような気がする。また、インドがソフトウェア人材の世界的供給地となっているのも、それらと関係があるように思われる。

それから、私には将棋の才能が数学的な素養と関係するような気がしている。というのも、将棋界には上下型が多く見られるからである。米長、中原、谷川、羽生らの棋士は上下型の要素が強い。ところが、囲碁の棋士には将棋の棋士よりも上下型が少ないように思われる。不思議である。

1種の普遍性を求める思考癖

1種の抽象化癖は「観念化」ともいえる。抽象化の根本は、観念を確定させることだからである。このあたりを少し説明しよう。

「実体」に対しては、「属性」と「観念」とが常に存在する。たとえば「りんごの実体」を例にとって考えてみよう。

この場合、りんごの属性は「赤い」「甘酸っぱい」「手にすっぽりおさまる大きさ」「かじれるほどの固さ」などである。一方、りんごの観念とは「りんご」という抽象化されたシンボルイメージのことである。

1種の場合は、観念ばかりが頭に浮かび、属性はほとんど浮かばないという特徴がある。これに対して、3種は属性ばかりが浮かぶ。

1種の場合、できるだけ観念で表現することを好む。だから「きみの言いたいことをひと言で言えば〇〇だ」と「ラベル」を貼りたがる。1種はそうすると落ち着くのである。

現実の問題に弱い1種

観念とは抽象化されたイメージであるから、現実からどんどん遠くなる。そのため、1種は現実問題にきわめて弱い。

1種は現実が近づいてくると、何もできなくなる。電話だともものすごく怒れるが、面と向かったら全然怒れなくなる。そこで、1種は常に現実から距離を置こうとする。

また、1種は常に予測しようとする。事態が現実起きると自分では対応できないことを知っているから、無意識に予期しておこうと思うのである。

計画も同じことである。予期せぬ出来事が起きると動転するから、前もって計画しようという気になるのだ。

しかし、計画してしまえばそれで終わりなのが1種である。計画ができると、もう気が抜けてしまう。だから1種は言論人にしかなれず、行動家にはなれない。

1種の営業課長は部下に日々の行動計画を必ず書かせる。だが、計画表を出せばもうそれだけでよしとなる。

また、計画するのは得意だが、それだけでよくなってしまいうので実行しない。家族旅行を計画すると、それで満足してしまい、旅行の日を忘れてしまう。家族から怒られるのは当然だ。

こういう人は、基本的に現実はどうでもよいのだろう。先を見通すことにはたいへんすぐれているが、現実については無関心である。それで、人が困ったりしても非常に冷淡に見える。いざというときには、あまり頼りにならない。

1種はあきらめが早い。野球の監督で相手が7回にエースを出してきたら、もうダメだとあっさり見極めをつけ、あきらめてしまう。全力を尽くさないのだ。このあたり、どこかの総理大臣だった人とそっくりである。

2 上下型 2種

2種の体型

1種同様、2種は首から胸椎5番まではまっすぐ板のように平らだ。しかし、1種と違って、恥骨が膝より前に出ている。そのため、上半身は後屈する（うしろに反っている）。そして、あごが上を向く。

電車で居眠りをして船をこぐ人がいるが、上下型では、頭を前に倒して船をこぐのが1種、頭を後ろに倒して（あごを上げて）船をこぐのが2種である。

2種は全体癖のなかでもっとも長生きするタイプである。代表的人物には、福田赳夫や岸信介などがいる。

2種は1種と同じ上下型で、やはり頭脳派なのだが、頭の疲労感がわからないという特徴がある。1種だと頭が疲れば眠くなるのだが、2種はそれがわからず、代わりに胃がおかしくなる。だから、胃弱や胃潰瘍が非常に多い。非常に神経過敏で、神経が疲れるタイプだ。

迷走神経が過度に緊張する結果、それが通る胸鎖乳突筋という首の筋肉がカチカチになる。そのため、首が非常に細くなる。

また、首の緊張であごがそがれたようになる。その結果、2種の顔は逆三角形で、カマキリのような顔になる。

2種の感受性

1種の場合は、脳への血流が問題となる。したがって1種は血流で考えているともいえる。これに対して2種は脳神経で考えていると表現できよう。

2種は迷走神経が絶えず緊張している。この状態では、胃袋が収縮するので、吐き気をもよおしやすい。

口の中に指を突っ込むとオエツとなるが、これは迷走神経が刺激されるからである。朝起きて歯を磨こうとしたときに吐き気をもよおす人がいるが、これも迷走神経が過緊張状態になっているから起きる。これが常態になっているのが2種なのである。

2種がよく使う言葉に「吐き気がするほどイヤなヤツ」というのがある。そう言うのは、実は彼らが実際にそのような体感があるからである。

2種は胃をやられやすいが、胃潰瘍にはなかなかならない。胃潰瘍になる一歩手前の状態がずっと続く。胃潰瘍は血を吐けばすぐ治るとされるが、2種の場合は血を吐かないので、かえって胃の不調が慢性化してしまう。

2種は徹夜に強い。というのは、脳神経が緊張しているのがわからないからである。脳神経の疲労に鈍感なのだ。そのため、貧血で倒れるまで休まず徹夜を続けてしまう。

2種の頭の使い方

2種も上下型に属しているので、頭脳活動が盛んになる。ただし、1種は自分で積極的に頭を使うが、2種は頭を使わされるタイプである。

どういうことかということ、何か問題が与えられ、それを解くのが得意なタイプが2種だということである。

1種だと自分で考えたものでないと信じられないと思っているが、2種は白紙の状態からは考えられない。

2種は「発想」よりも「記憶」であり、「創作」よりも「解釈」に向いている。製品開発でいえば、1種は独創が得意だが、2種はすでにある理論や既存のものをベースに、応用したり改良したりするのが得意である。こういえば、日本企業の特徴とよく合致していることがおわかりであろう。

だから、2種に新しいものを創ることは期待してはいけない。彼らは永遠の学徒、書生である。

2種は勉強家であり賢い。ただし、常に手本があって、それを解釈し証明するタイプである。自分から疑問を感じ、発見していこうとはしない。日本人にはこのタイプが非常に多いといわれる。

この傾向は2種の役人にもいえる。既定路線を管理するのはうまいが、独創的な発想がうまれにくいのだ。

勉強家の2種にとって重要になるのが、適切なテキストを選択することである。ただ、これがいきすぎると、完全な模倣になってくる。しょせん真似などできるはずがないのに、なかには懸命に真似しようとする人が出てくる。ほかの人間から見るとマンガチックなのだが、本人は大真面目だ。

責任を逃れたい心理

1種は「要するにこれは何々だ」とひと言で言いたくなる抽象化過剰型だが、2種はそれがまるでできない。2種は、「要するに」「ひと言で言えば」がまったく言えないタイプなのである。

ことの大小が判断できず、すべてのことに気を使い、どれも尊重し、未決定状態を心に保持する。「千慮千惑」とは2種のことである。

また、2種は八方美人とも呼ばれる。どれも大事だということで、みなにいい顔をしたがるからである。ほんとに、どこかの政治家みたいだ。

2種は自分で意思決定をするのがとにかく苦手である。したがって、部下の立場にいたがる。2種は、部下の立場なら命じられたとおりに上司に従う。人に命じられることを容易に受け入れるのは、そのほうが楽だからである。要するに、責任を逃れたいのだ。

もし、2種が意志決定をしなければならない立場になると、頭のなかで思考のどうどう巡りが始まり、胃潰瘍になる。

そういうこともあってか、2種は自分の言ったことを信じられず、人の言葉を信じやすい。また、噂を信じやすく、書かれたものを信じやすい。

こういうタイプはどこに多いだろうか？ そう、役人に非常に多く見られるタイプなのだ。

2種のおしゃべり好き

2種というのは、書生という言葉が実によく似合うタイプで、人の言うことをともかくよく聞く。これほど人の話をよく聞ける人種は2種以外にはないだろう。

ほかの体癖、たとえば1種は人の考えなど何も聞いていない。捻れ型や9種などは、聞くふりをしながら、自分の価値基準に沿って聞いてしまう。

その点、2種の場合は自分の価値基準を捨てて聞くことができる。そのため、2種が行う解釈は、常にもっとも正しいものといえる。

ところで、2種はまわりにいつも気兼ねする八方美人なのであるが、その2種が実はたいへんな批判能力を有しているというのも不思議なことである。2種の特徴に、悪口とか軽口というのがある。これが痛烈に相手に響く。

批判上手であるから、2種を批評家のなかによく見かける。ところが、2種という人種は、圧力に非常に弱い面がある。腕力という物理的圧力だけでなく、世論とか常識の力にも弱い。そういえば、役人は世論を極端なまでに警戒する。

2種はおしゃべりで、しゃべりたくてしかたない。ただ、ふつうはそれを抑制して、陰で悪口を言う。ところが年をとると、そのたががはずれてしまう傾向がある。

3 左右型 3種

3種の体型

3種は顔全体が丸い感じがするし、体全体も丸く曲線的である。やせていても太ってもいても、丸いという印象がある。

左右型は、重心が左右どちらかに大きく偏っているという特徴がある。左右型でなくても、たいていの人は重心が左右どちらかにずれているものだが、3種や4種はそれが極端に偏っている。靴底を見ると、片方が極端にへっている。

3種はおおむね左重心である。この場合は、通常右肩が高くなっている。しかし、偏りがはなはだしくなると、こんどは左肩が高くなる。ここまですると、心悸亢進のために顔が赤くなる。

注意しておくが、肩の高さの差があるかなしかで、安易に体癖を決めつけるのは危険だ。他の体癖の人のなかにも、左右の肩の高さに違いのある人はいる。肩の上がり下がりだけで体癖を見分けるのは、素人にはなかなか難しい。ひとつの要素だけで判断しないで、心理的な傾向などもよく考えあわせて判断していただきたい。

左右型は重心が偏っているので、重心側の体の部位が縮んでくる。足は重心側が太く短くなる。顔を見れば、眼は重心側が細く、鼻の穴もそちら側が小さい。それで、私は美人の鼻の穴をつい見てしまう癖がある。友人は「あまりよい趣味ではない」と言う。

左右型が水泳をすると、重心側にどんどん寄ってしまう。スイカ割りでもそうだ。手を伸ばすときは非重心側の手を伸ばす。ものを抱えるようなときには重心側の手を使う。重心側の腕は縮んでいるから、ものを抱えやすいのである。

だいたい3種というのはよく食べるので、背中の中あたりの筋肉が腫れてくる。背中がものすごく曲がっているお婆さんをたまに見かけるが、ああいうふうにひどく背中が曲がってしまうのは3種である。年をとってからは遅いので、若いときから体を整えておいたほうがよい。

3種の食欲

左右型というのは、腰椎2番に重心のかかる体癖である。腰椎2番は左右運動を支配する。また臓器的には消化器の中樞である。消化器は人間の感情がもっとも反映されるところでもある。そこで、左右型には、好き嫌い、愉快、不愉快といった感覚が常につきまとうようになる。

左右型でも、3種のほうはエネルギーを消化器で発散させるところが特徴である。とにかく3種はものすごく胃袋が丈夫である。嬉しいと言っては食べ、悲しいと言っては食べる。食べていれば、感情のバランスがとれる。いくら食べても胃袋をこわさず、食べていないと落ち着かない。

ふつうは、大きなストレスがかかると食べられなくなるものだが、3種はそういうときこそ食べる。食べることでストレスを解消しようとするのだろう。そして、3種はおなかがへると、とたんに元気を失う。

食べることが好きなだけに、料理の腕はよい。腕のいい料理人には3種が多い。ただし、後かたづけは嫌いだ。

3種はとにかく賑やかで、明るくて元気だ。子供は「お母さんがいると騒がしくてイヤだ」と文句を言う。

3種の声は、コロコロ鈴が鳴るようで、小鳥のさえずりのようなところがある。ソプラノ歌手は、たいてい3種か開型10種なのだそうだ。

男では、梅原龍三郎や江藤淳が3種の代表である。女性の3種は、そこらじゅうにころがっているから例示するまでもないだろう。

3種の感受性

3種というと、女性を連想することのほうが多い。3種は色白美人で、明るくて騒々しく、気分屋、気まぐれである。日本人の女性にはこのタイプがかなり多い。

3種の顔には幼児性が残っている。丸顔で、あごが発達しておらず、顔の造作が下のほうに小さくまとまっている感じ。鼻は長くない。

3種の性格は顔と同じで幼児そのものである。幼児特性を大人になってもそのまま残しているということだ。幼児性とは、つまり自己中心的で、好き嫌いがはっきりしているということである。

3種は非常に感情的で、いつも好き嫌いの感情で行動する。彼女たちは「いくら理屈を言われたって、イヤなものはイヤよ」という人たちなのである。

好き嫌いで動き、あっけらかんとしていて、無頓着。悪くいえば、独善的で人のことを考えない。組織の秩序には極端なまでに無頓着である。

こういう人が社会に出ると、年上の男に対して平気でなれなれしい態度をとる。女性ジャーナリストは、男だったら口に出せないような質問を平気でする。

これができるのは3種だからであろう。それでスクープをあげたりするから、世の中はそういうぶしつけな質問をする人も必要だということなのであろう。

気まぐれな3種

3種のもうひとつの特徴として、気分屋ということがある。とにかく気分の変動が激しいのである。

ものすごく怒っても、すぐケロッと忘れる。怒られたほうは、まだしこりが残っているのに、それを見て「あんた、何まだ、ぐずぐず言ってるのよ」とくる。

3種は気分が一定のところにとどまらない。気分起伏がある。よい気分でも、次に悪い気分がこないと楽しくない。いつまでも幸福では愉快に感じないのである。3種にとって、気分の変化だけが幸福感を得られる。

気分を変化させたいがために気晴らしをするような相手であるから、まともに話をしようとしないうほうがいいかもしれない。こっちが一生懸命話しているのに、すぐ話題が変わってしまい、いったいなんなんだこの人、という感じになるからだ。

3種と相手をするときは絶対自分の思い通りになるとは思っていない。そのかわり、話を聞いていても全部真剣に答える必要はない。空返事がうまくないと3種とはつきあえない。

3種は基本的にあまり自分で責任をとりたがらない。だから、彼らを責めるときは、必ず逃げ道を用意しておかなければならない。あまり追い詰めると逆上して何をされるかわからないからだ。窮鼠猫を囓むである。

だいたい3種というのは、鋭角的な刺激をいやがる。好きなのは、じわじわという感じ、しかもあまり強く押し込まない、そういう刺激でないとダメなのだ。

乱雑

3種は部屋をきれいにしているが、実は家のなかで一カ所だけ「開かずの間」がある。何でもかんでもそこに乱雑に押し込んでしまい、あとはきれいでしょという顔をしている。

あるいは、押し入れに乱雑にものを詰め込む人もいる。また、机の中や、ハンドバッグの中が乱雑になっている人もいる。見えなきゃ平気ということなのか。もっ

とも乱雑に押し込んであるように見えても、本人はどこに何があるかわかっている。人が整理してくれると、どこに何があるかわからなくなって怒りだす。

3種は美的感覚がすぐれているので、画家に多いとされる。洋服はきれいな明るい派手な色を好む。梅原龍三郎（この人も3種）の絵のような色づかいが好きなのだろう。

しかし、3種は色づかいには関心があっても、形にはまるで無頓着である。洋服を買うとき色で選んでしまうため、体のラインに合わないものを選んでおかしい姿になることがよくある。

3種にとっての養生

3種が我慢してはいけないこと。それはおならである。ガスがたまるのは、だいたいにおいて、退屈しているからだ。つまり刺激がなくなっているということ、新しい刺激がほしいということである。

退屈するとガスがたまって、八つ当たりをしだす。あるいは、お皿を投げついたり割ったりする。結局は、エネルギーの分散を無意識に図っているのだが、八つ当たりをされたり、お皿を割られたりするよりは、おならをさせたほうがまだましだろう。

参考までにいえば、上下型が我慢してはいけないのはあくびだ。上下型があくびをしたくなったら思いっきりすること。頭の疲れが抜ける。

それから、3種にとっての健康のバロメーターは快便である。3種は栄養を蓄積しようとする体質である。冬眠動物のような体質ともいえるだろう。冬眠なのだから、当然便秘気味になる。このことと交感神経とは関係がある。

3種は交感神経反応が強い。3種は色白であるが、肌が白いのは交感神経と関係があるらしい。

これに対して、同じ左右型の4種は、下痢とか軟便になりやすい。不要物の排泄が進みやすいタイプである。4種は副交感神経反応が強い。4種の肌はちょっとくすんだ感じになる。

便秘がちの3種にとって、排便は心理的な影響がとて大きい。嬉しくて調子がよいときは排便が順調になっている。しかし、何か問題があると便秘する。便秘にいちばん敏感なのが3種なのである。

愛嬌と色気があって、男性に人気のある3種だが、更年期を過ぎると、突然オバさんになってしまう人がいる。

更年期になるとブクブク太りはじめ、食い気ばかりになって、凶々しい感じがしてくるのである。あるいは妙に金に汚くなるとか、がめつくなる。物欲の権化になる人がいる。

原因は更年期のホルモンの変調である。この時期には、特に食べすぎに注意しないとイケないそうである。

3種の男

3種というと女性を想像することが多いが、最後に3種の男にも軽く触れておこう。3種の女性と違って、3種の男は感情を必死で殺して生きていく。彼らは年をとるほど、腰が低くなる。感情だけでは生きぬけないことを社会生活で学ぶからだ。

宮沢喜一元総理（この人にも3種傾向がある）はよく「政治は損得勘定だ」とテレビで語っていたが、そういう「建前」を3種は学び、「好き嫌いの本音」を抑えるのである。

しかし、これは3種にとっては苦痛であろう。だから、思わぬところで本音がひょっこり現れる。たとえば、酒の席で抑えがはずれてしまい、酒癖がすごく悪くなる人がいる。

葬式でお坊さんの頭にハエが止まるのを見て、いけないと思いつつもつい嘔き出してしまう——こういう行動も、抑えている本音がつい出てしまうことだと解釈できる。当然ひんしゆくをかうわけだが、そういうときでもペロッと舌を出して見せるような愛嬌がある。

3種の社長は、家では父らしい威厳はない。子供と同列になってしまう。公と私が明瞭に別れている。3種の男は、家族や気の許せる親しい者の前では、喜怒哀楽を激しく見せる。

その点、上下型はいつでもどこでも公だ。上下型の会社員は、家では奥さんに対して社長と部下の関係になる。学者なら家でも学者だ。

4 左右型 4 種

4 種の体型

4種は丸いけれども細いのが特徴である。歌手の石川さゆりさんは、このタイプではないだろうか。八千草薫さんもそう。おとなしくてひそやかな感じで、笑うと一瞬光る。山口百恵さんも4種のような気がする。

いかにも楚々とした和服の似合う日本的美人といった感じの人が多く、日本の男には圧倒的に人気がある。

3種と4種の比較でいうと、3種のほうは感情が表にぱっと出るので、たとえばヒマワリという感じだ。これに対して4種のほうは、感情が表に出にくい日陰の花という感じである。

なかには、丸い感じがあまりなく、直線的な感じの人もある。そのあたりを外見だけで見分けるのは素人にはちょっと難しい。そういうときは、やはり感情の表現方法を観察するとよいだろう。

4種は眉が濃いのが特徴である。ただし、太くはない。村田英雄のように眉が太いのは捻れ型。4種は眉が濃い、太いわけではない。

洋服の趣味は、淡い色やモノトーンを選ぶ傾向が強い。書道のうまい人が多いのは、それと関係するのであろうか。詩や短歌を詠むのもうまい。ふだん言いたいことを言えない性分だけに、それを歌にするのがうまいのだろう。

料理をするのは嫌いだが、味にうるさいから料理はうまいとされる。

重心が左右どちらかに過度に偏る左右型4種は、だいたい右重心の人が多いとされる。けれども、必ずしも断定はできない。

4種の特徴は「左の肩が上がる」と『体癖一』にはあるのだが、この解釈は案外難しいと私は思う。「上がっている」というのではなくて「上がる」と書いてあるからである。

つまり、肩の上がり下がり具合は、肉体や精神の状態によって変化するのである。それに、左肩が上がっているからといってすべて4種だとは限らない。肩の左右差だけで単純に4種かどうか見極めるのは、危ういような気がする。このあたり、本のみで学ぶ危険性があるように思う。

4種は栄養不良型

3種の項で、3種は栄養蓄積型（冬眠型）であり、4種は排泄傾向が強いタイプだと解説した。つまり、3種が栄養過剰であるなら、4種は栄養不良ということである。栄養吸収低下型といったほうがよいかもかもしれないが。

4種は栄養不良の人とそっくりな体の状態をしている。断食をすると肝臓機能が悪くなり、色が黒くなり、シミが出る。これが栄養不良の特徴なのであるが、こういうときでも食べれば症状は改善される。ところが、4種は食べてもこのままの状態が続くのである。

それと、一気にガバッと食べられない。3種は一気のドカ食いができるのに、4種は細切れに不規則に食事をとる。

4種の感受性

4種が不快だと思うときは、「あの人、不潔ね」というような言葉をよく吐く。もっとも、そういう言葉はもらしても、感情はあまり表に出ない。怒るとちょっとプツと膨れるが、何も言わない。細かい感情がいつもわいているものの、それを表に出さない。いや、言えないのである。それで、表面的にはとても穏やかに見える。

ところが、うちにこもってしまった感情が消化器の異常となって表れる。4種はイヤなことがあると、とたんに食欲が落ちる。どんなに食べようとしても胃が受けつけないで下痢になる。

苦手な人とつきあうのが「イヤだな」と思うと、もう食べられなくなってしまう。何か心配ごとでもあったら、おなかがすかなくなってしまう。

風邪をひいても食欲がなくなる。疲れても食欲がなくなる。眠りが足りなくても、心配ごとがあっても、食欲がなくなる。思春期の拒食症は、4種がかかりやすい病気だ。

ところが、おなかがすかないのだから食べなければいいのに、絶えず食べたいという欲求はある。それで、一口つまむ。すると、ちょっと食べたただけでおなかが一杯になって下痢をする。口さびしいのだが食事の量を十分にとれず、栄養不良になってしまうのである。

4種は表面に感情が表れない

4種は感情表現が乏しい。喜怒哀楽を表に出すのが非常に下手である。ただし、内面では非常に感情的な人間なのだ。常にさざ波のような細かい感情がわいているが、それを表に出さない。いや、出せないのだ。

このあたりが、ほかのタイプの人間からすると、とてもわかりにくいところである。

「あの人は日本的な女の人だ」というと、だいたい4種だ。あまり感情が表面に出ないで、なんとなくおしとやかで、控えめで、ときどきチラッと笑顔が出る。

ところが、こういう人と結婚するとひどい眼にあうそう。感情が表に出ないので、何を考えているかさっぱりわからないからだ。

何か不愉快なことがあると、文句を言わずプツと膨れるだけである。それで、しばらくすると終わり。もう気がすんだのかと思ってしまう。

ところが、本当はそうではなく、感情が他人の眼に触れることがないだけで、不満はずっと心に残っている。それが、何年かして、何かの拍子に思い出したように突然出てくる。それで、びっくりさせられるのだ。

4種の「やまびこ」のような感情

4種は快の感情は持続せず、不快の感情が長期間持続する。しかし、偏り疲労の状態になると4種は自分自身の感情がわからなくなってくる。自分が喜んでいるのか、悲しんでいるのかわからないというのだから不思議だ。

そこで、どうなるかという、相手の感情に非常に敏感になる。そのため、相手の感情に合わせて感情を抱くようになる。

たとえば、自分はこの人を愛しているのかわからないが、相手が自分のことを好きと思っているので、相手のことが好きになる。また、相手が怒ると自分も怒る。もらい泣き、もらい涙などもそう。

こういうのを「やまびこ」のような感情と呼ぶそう。

だから「あなたはこれが似合うわよ」などと言ってもらいと、4種はとてもほっとする。他人から断言してもらいと、それが自分の心だと思ってしまうわけだ。

こういう人が相談に来たら「あんたのやったとおりで間違いはない。それでよかったんだよ」と断定すべきだろう。相手はそう言ってもらいたいだけなのだから。

それを「ああだ、こうだ」とよけいなことを言うと、4種に振りまわされて、わけがわからなくなる。

4種の被害者意識

4種は自分自身の感情に鈍く、他人の感情に敏感だが、偏り疲労がさらに濃くなると、「常に自分は誰かに責められているのではないか」と感じるようになる。つまり、被害者意識が非常に強くなるのである。

自分の感情がはっきりしないがために、なぜそうなったかがわからず、常に誰かのせいであると感じるようになるのだろう。そして、それがさらに自虐的傾向へと結びつく。

亭主が浮気すると亭主を責めないで、「私がいるからダメなのよね」とか、「私がいるから窮屈なのよね」と言う。体が弱ってくると「自分が死んだほうがみんなの幸せになるの」と言ったりする。

ところが、これは本能的な策略ではないかと思えるのである。本人にはそんな意識はないのかもしれないが、自分の弱さをまわりに見せつけて、結局は自分の欲求を通してしまうのだ。

それで私は4種はどれも苦手である。いつも気兼ねさせられて、いつの間にか相手のペースにはまっているような気がしてならない。

弱い者は実は強いのである。それは我々が、弱い者をかばおうという本能があるからだ。4種は、それに支えられて生きていこうとする本能があるように思える。

4種の女性というと「日本のお母さん」というイメージがよく似合う。それは、けして自分を前面に押し出したり主張したりせず、いつも優しくあたたかくふわっとした愛情で子供を包んでくれるように見えるからだ。

子供を叱るときでも、3種のようにガーッと怒鳴るのではなく、「お母さん、悲しい」などと言って、子供を叱らなければならない自分を嘆いてみせたりする。

ところが、これなどはいかにも4種的自虐的行為かつ無意識の策略のように思われるのである。子供はお母さんを悲しませてはいけないと思う。子供ですらすっかり騙されてしまう。

4種といっしょにいると神経が疲れる。見かけだけなら4種は私の好きなタイプなのだが.....。

4種の職業

4種は書家に多いとされる。モノトーンの世界が栄養不良の感覚にあっているのかもしれない。

だいたい賑やかな色彩の絵を描く人はエネルギー過剰だといって間違いない。3種の代表である梅原龍三郎の絵などは、ものすごく色が賑やかだ。

書家以外に4種には女流の作家もいる。日本文学のかつての主流はこれだった。

月に雲がぼんやりかかり、雪がちらついている——こんな情景にであうと、4種はしみじみ感じられるのだろう。「ものの哀れ」といったあいまいな感覚、微妙な感情表現、女流作家が描いてきた古典ものはきわめて4種的な世界である。

こういう文章を4種以外の人間が読むと、なんだかもやもやするばかりで、何を言いたいのかよくわからない。

5 前後型 5 種

5 種の体型

各種の体癖のなかで、奇数種は肉体のある部分が非常に強いという特徴がある。上下型 1 種は頭脳派であるから、年をとっても明晰な論理能力が衰えることがない。3 種であれば、胃袋が鉄でできていると思わせるほどいつまでも丈夫である。また、9 種であれば、生殖器が年をとってもピカピカな感じがする。

5 種の場合は呼吸器が非常に丈夫である。だから 5 種は肺結核にはならない。ただ、結核菌がはじき飛ばされて、いちばん弱い腸にいき、腸結核とか脊椎カリエスになることはある。

5 種の体型の特徴は首が前に出ていることである。また、筋肉質で、肩幅が広く、腰が細い逆三角形タイプである。そして、しょっちゅう下痢をしている。

ちなみに、アメリカは 5 種がもっとも活躍している国である。アメリカ人的陽気さと軽さ——自主性がある、華やかで陽気で明るく、目立ちたがり屋で行動的で社交的——これが 5 種の特徴といえよう。

5 種の代表には元総理の細川護熙さんがいる。

女性にももちろん 5 種はいるのだが、少しわかりにくい。5 種の女性は、女性としては筋肉質である。女性がボディビルをやっても、ふつうは筋肉ムキムキにならないが、5 種の女性だけはムキムキになる。

十九世紀以前はルノアールが描くような曲線的な女性が好まれたから、5 種の女性は当時であれば女性とは思われないような体型であるといえよう。

5種は、その丈夫な呼吸器を絶えず働かせて、体のバランスを保とうとする。呼吸器を働かせるということは、要するに体を動かすことであり、運動をするということである。

5種は短距離水泳のような呼吸器の使い方を特に好む。息を詰めてじっと耐え、ぱっと息を吐くというようなことである。鬱散感がはっきりとして、気分がよいのである。

5種はマラソンやエアロビクスは好まない。息をだらだら吐き続けるようなスポーツは苦手だ。

5種の感受性

5種を前後型と呼ぶのは、重心が腰椎5番にかかるタイプだからだ。腰椎5番は前後運動を支配しているところなのである。

偏り疲労が濃くなると、5種は前屈傾向がはっきりしてくる。前屈して元に戻らなくなるのである。これを「第一次偏り」と呼ぶ。

この状態になると、胸部が硬直して息が吐きにくくなる。これは肋間筋が硬直するため起きる。

胸がこわばると、知らぬ間に自分の感情を抑制してしまう。こうなると、現実感を緩和する感情の働きがなくなり、とげとげしい現実だけを感じだす。

あらゆる人間のなかで、もっとも現実感にあふれているのが5種である。彼らは感情抜きで現実をきちっと見据え、客観的に判断することができる。

感情から離れ、利害や損得でものを判断できるのである。それは、つまり、割り切り、打算、妥協といった能力がすぐれているということをも意味する。

5種にとっては現実に対処することだけが重要なのであり、理論をじっくり考えたり構築したりすることはどうでもよいことである。そこで、気に入った理論のなかで都合のよいところだけを要領よくつまみ食いして、すぐ行動に移す。

5種は現実とうとい上下型の政治学者や経営学者をバカにする。5種は現実との乖離を徹底的にバカにし、上下型をバカにする。

また、5種は計画など信じない。情勢は常に変化すると思っているから、上下型が計画にこだわるのを見ると、あきれてバカにする。一方、上下型は5種に結果論をいわれると非常に弱い。

割り切りのよさ

割り切りのよさという点では、5種にかなう者はいないだろう。統計手法などはいかにも割り切り好きの5種好みのツールといえるだろう。欠陥品の発生する確率を5パーセントに抑えようとする経営手法がある。

ところが、日本人の場合は、この手法を使ったとしても、なんとか欠陥率をゼロにもっていこうとする。

だが、アメリカ人は、5パーセントより精度をあげればコストがよけいにかかるから、それ以上やる必要はないと考え、そのかわり検査で欠陥品を拾い出せばよいという発想になる。このあたりの割り切り方が5種らしい。

5種は政治家にもときどき見られる。これは物事を割り切って妥協点を探すという政治行動が、彼らに向いているからだろう。

冷静で合理的な行動をとる5種は非常に誤解されやすいタイプでもある。合理的な行動が、ともすれば冷酷な人間のようにとらえられるからであるが、実際には5種は非常に感情的な人間なのである。

ただ、その感情を抑制する力が非常に強いのである。その点、感情が希薄な上下型とはまるで違う。いったん感情抑制のたががはずれると、5種は思いもかけぬほど感情的になるので驚かされることがある。

5種の多角性

5種の感受性にはもうひとつ特徴がある。それは視点がひとつではない、ということである。つまり多角的に物事を考えられるということである。

5種以外の人間は、あるひとつの視点があり、それを通して主義主張が生まれる。そういう意味では一貫性がある。ところが、5種の場合は、視点を複数とれる。そこで、ディベートのようなことが得意になる。

終戦からしばらくの間、労働運動が非常に盛んで、経営者は労働組合対策に苦勞したそうだ。そこで、考え出されたのが、労働組合の委員長を役員に抜擢することであった。

いままで、組合員の立場でものを言っていた人間が会社側の立場になると、たいの者は腑抜けになってしまうのだそうだ。

ところが、5種だけは平然としている。「これはこれ、それはそれ」とスパッと割り切れてしまう。立場が変わっても、なにごともしなかったように振るまうことができる。

5種はひとつの視点に固執しないので、そういうことができるのだが、そのあたりを上下型が見ると、一貫性がなく、いかにも無節操に見えてくる。

5種が嫌うことに「ひとつのことにこだわる」ことがある。それは「深刻」ということでもある。

別の見方をすれば、深刻とは呼吸器の働きを制限された状態である。だから、5種は当然のごとく深刻が嫌いだし、深刻ぶっている人も大嫌いである。

損得勘定と人間関係

合理性を別の言葉でいえば、損得勘定に明るいこと、計算に明るいことである。そのため、有能な経営管理者のなかに5種をよく見かける。

また、5種のなかに、冒険家を見かけることがある。冒険というと、危険をかえりみないで行動することのように思ってしまうが、5種の冒険は彼らなりに計算ができていなのだ。緻密に準備しているので、必ず彼らなりの勝算がある。だから、彼らはそれを冒険とは思っていない。

ところで、冒険型だと思われる起業家には捻れ型のほうが多いように思われる。起業では勝算を計算するのが難しいのか、意外に5種は少ないように思う。衝動的にエイと行動してしまう捻れ型のほうが起業に向いているといえそう。

5種は常に損得を考えるから、人間関係においても自然とそういう方向に向かう。女性のパートナーを選ぶ場合でも、実家がお金があるとか、相手が有名人であるとかいうことがとても気になる。

あるいは相手を美しいアクセサリーのように見ている節がある。ピカピカしたものが好きなのも5種の特性なのである。

結婚したあと、そういった条件は変化する場合があるから、あとで「損をした」と後悔することがままある。

また、5種は負い目のある人間関係を嫌う。相手に対して常に「貸し」があるような人間関係を無意識につくろうとする。

借金をしている相手に対し「まあ、期限など気にするな」と言えば、まともな相手なら借りをつくった気になるだろう。そういう人間関係をいつの間にか5種はつくる。

その点、6種は、自分が負い目を抱くようになる関係をわざわざ好む。

睡眠の質

5種は元来食事も少なくてすむし、睡眠時間も少なくてすむ。4時間程度寝れば十分だという人は多く、徹夜がまったく気にならない。徹夜麻雀で掛け率が高いようなときは、特に元気である（5種は賭け事が好きなのだ）。

5種はどんなところでも寝られる。机の上に突っ伏したまま眠ったり、ソファーに腰掛けたまま寝たりしても平気だ。5種は寝入るのは難しいほうだが、眼が覚めるとぱっと起きて活動できる。

睡眠に対して非常にうるさいのは上下型である。上下型はとにかく寝るのが好きである。いつもより一時間早く起こされたりすると、「睡眠不足になった」と一日中気にかける。

また、上下型は仰向けになって寝ないと寝た気がしない。ソファーに腰掛けて寝ても、寝た気がしないのだ。

ところが、上下型は「睡眠が足りない」とよく不平をもらすにもかかわらず、めったに睡眠不足には陥らない。それとは対照的に、5種は睡眠不足を感じないくせに睡眠不足になる。

5種が偏り疲労の状態、つまり胸がこわばった状態になると、眠りの質が非常に悪くなる。しかも、それに5種は気がつかないのである。

この状態がさらに進むと、男はあごが張り、女はほお骨が張るようになる。こういうときは、5種らしくもなく現実が見えなくなり、不安にかられ、現実におびえだす。

5種がこの状態になると、迷走神経の緊張が腸に影響して下痢をするようになる。すると、肋間筋がゆるみ、偏りが抜ける。

だから、5種はしょっちゅう下痢をしている。5種は下痢をするのが当たり前で、下痢をしたら調子がよくなると思っている。5種の人には、一度も固い便をしたことのない人が多い。

呼吸器を働かせる生活

5種は呼吸器が非常に丈夫なので、なにかと呼吸器を働かせようとする。頭を使うときでも食べるときでも、呼吸器を働かせずにはられない。

5種は呼吸器を働かそうとして、うどん、そば、お茶漬けといった、呼吸器的食事——息を吸い込むようにして食べる食事を好む。

また、仲間を呼んで大声をあげながら賑やかに食べる。これも呼吸器を使いたいからである。

勉強も呼吸器を使うほうが効率があがる。机にしがみついて勉強するようなやり方では5種の頭は働かない。運動をしてから勉強すると、かえって勉強の効果があがる。

そのため、5種には、スポーツと学業を両立させている人が多い。文武両道とは5種のことである。5種の文化が浸透しているアメリカのインテリ世界では、スポーツのできることがステータスになっている。

5種にとっては、物事を並行して進めるようなことはまったく苦にならない。「ながら族」は5種のお家芸だ。

彼らは騒々しいほうが本をよく読める。その点、上下型は静かでないとまったく考えられない。

5種は広く浅くが特徴であり、ひとつのことを深く掘り下げることが嫌う。そして、一貫性などまったく気にしない。そのため、絶えず変化していく。それで飽きっぽいと見られる。

3種も飽きっぽいといわれるが、この場合は気分の変化に従って行動する。これに対して5種は環境を変化させたいと思う。実際、5種は環境が変わってもいくらでも適応できる。

5種の社交性

5種は、じっとしているような生活、たとえば楽隠居のような生活には耐えられない。そういう生活が続くと体に悪い影響が生じる。

賑やかなことが好きな5種にとって、一人でぽつんとして仕事をするようなことは、牢獄にいるようなものである。5種は常に、まわりに人がいて大騒ぎしていないといられない。

5種は大勢の人から見られるとものすごく張り切るようになる。ゴルフでも、ギャラリーが多いとがんばる。見てくれる人が誰もいないようなときには、全然やる気が起きない。

5種は徒党を組むのが好きである。逆にいうと、集団から孤立することが、非常に不安になるのである。

5種は集団のなかにいると、人を動かすことに快感をもつようになる。本来行動家であるにもかかわらず、自分が動かずに人を動かそうとする。

5種の攻撃性

5種は実は非常なる攻撃性を秘めている。捻れ体癖と同じくらいの攻撃性をもっている。同じ攻撃的な本能をもつため、5種は捻れ体癖を絶対的に毛嫌いする。では、5種と7種の攻撃性は、どこがどう違うのか。

5種は勝負するとなれば、相手は誰でもよい。勝てばよい。子供でも勝負となれば勝ちを譲ることはない。わざと負けてあげるようなことは決してしない。

その点、7種は強い相手と戦わなければおもしろいと思わない。いちばん強い相手に向かっていく。「負けてもともと」ということができる。

5種の競争は自分との競争になることが多い。つまり、記録との勝負である。これに対して、7種はあくまで相手と戦うことに眼がいく。

たとえば棒高跳びは5種の世界の競技であり、捻れ型はけして出てこない。一方、柔道や相撲のような格闘技は圧倒的に捻れ型の世界である。捻れ型にとって、直接的に相手と接しない水泳やマラソンはまるで興味をもてない。

5種は心のどこかに自分に対して挑戦する気持ちがあるようだ。記録に対する挑戦と似たようなことなのかもしれない。チャレンジせざるをえない何かがあるのだろう。「もうちょっとお金持ちになろう」という具合に、常に自分にチャレンジするのである。

チャレンジはいろいろな分野で起きる。冒険もそうだ。冒険はハッとすることを好む5種の呼吸器の使い方にかなうものだからであろう。

6 前後型 6 種

6 種の体型

6種は呼吸器が弱い。胸は薄く、肩が内に巻いている。呼吸器の弱い6種の肌は、透き通ったような白さがある。また、あごがしゃくれていて、横顔が三日月のような形になっている。

6種は、頸椎7番と胸椎1番のそりが非常に悪く、首がいつも前に落ちている。偏り疲労時になると、胸が張ってえもんかけで吊されたような状態になる。

最近では、6種の混じったタレントを非常に多く見かける。現代においては、6種はとても人気がある。

同じ前後型でも、5種と6種はかなり印象が違う。5種は呼吸器が丈夫で現実主義者であるが、6種は現実を見つめることに気後れしてしまい、現実から離れようとする。その点では上下型とやや似ている。

ただ、上下型の場合は、現実をできるだけ遠くから見ようとするのであるが、6種は現実と夢の境がわからなくなる。結局、6種は夢想の人だといえる。

6種は体を使うのが苦手だから、汗臭いスポーツ、特に相撲のような格闘技は大嫌いだ。彼らが好むのは、キラキラ輝く華麗なもの——バイク、サーフィン、カーレースなど、いかにも現代風のファッションブルなスポーツや娯楽が好きである。

呼吸器への負担

欧米人は、日本の梅雨がとても苦手である。これは欧米の気候が元来乾燥地域が多いため、湿気に対応することができないからである。しかし、日本人でも梅雨時になれば、たいていの人が気分が暗くなり、胸苦しくなる。

この原因は呼吸器がへたることからくる。梅雨時になると湿度が高くなり、汗が蒸発せず皮膚にまとわりつく。その結果、皮膚呼吸が妨げられ、肺呼吸への負担が格段に増してくるのだ。

このような梅雨時の苦しい状態が一年中続いているのが6種なのである。とりわけ、梅雨時が彼らにとって具合が悪いのは、いうまでもない。

呼吸器が弱いと陰気になる。そのくせ食欲だけは旺盛になる。酸素を摂取できないため、そのぶんを食事で補おうということなのか、6種はよく食べる。

6種の感受性———夢想家

同じ前後型でも、5種のほうは肋間筋が硬直し、息を吐きづらくなる。これが心理的にほっとできなくなること、つまり不安感をもたらすのである。それを解消しようとして、5種は積極的に動き回る。

逆にいうと、動き回らないと5種は気が落ち着かない。だから、5種の受験生は机の上でじっと勉強するようなことは勧められない。ひとつ走りしてから勉強すればよい。

これに対して、6種は偏り疲労になると、肋間筋が弛み、息を十分に吸えなくなる。そのため6種は動けない。動きながら考えることができない。

また、人に会うことがおっくうで、常に一人でいたがる。社交というのは呼吸器が丈夫でないとできないものなのだ。6種は、見知らぬ人と出会い、生活圏を広げ、友達の輪を広げることが苦手だ。

6種は、5種のように行動したいのだが行動ができない。頭のなかでは、こうしよう、ああしようという理想があって、空想が広がっているが実行には臆病になる。その結果、夢と現実が激しく葛藤するようになる。

6種にとっては、ビジョンを描く能力と行動力との間のギャップが大きな悩みなのだ。そこで、6種は行動しないかわりに多弁になる。会話をしているとほとんど独演会になってしまう。しかも、言葉はやたらと熱い。陶酔したように、情熱的に一人で延々としゃべる。

新興宗教の教祖にときどき6種が見られる。それが革命時には、扇動家、アジテーターになる。自分は動かず、人を説いて動かすようになる。

6種の行動

呼吸器の強い人間ならば、行動する前に不安が生じ、それが行動の抑止力となる。だが、呼吸器の弱い6種は現実に対して甘い判断をし、現実よりも夢想に対する情熱がまさるようになる。その結果、突然とんでもない熱狂的な行動、激した行動をとってしまうことがある。

初期の結核患者が大胆な行動を起こすことはよく知られている。呼吸器の弱い人間は、とんでもなく大胆な行動をとることがときにあるのだ。しかも、それが歴史を転換していく場合すらあるから、恐ろしいといえれば恐ろしい。

6種の代表としては、三島由起夫や太宰治がいる。三島は自分の貧弱な体にコンプレックスを抱き、ボディービルにせっせと通った。自分自身の女々しさを取り除こうとしたのであろう。

三島の切腹は三島にとって男らしさの象徴だったのであろう。彼は夢や情熱のために行動してしまった。

異性への特別な態度

6種にとって、最大の現実は異性である。6種は異性に対して甘えることが巧妙である。同性に対しては自分の本心を打ち明けられないが、異性には打ち明けられる。

6種は常に庇護を望んでいる。誰かに支えられたいと思う。特に異性に対してそれを求める。

6種には異性に対する独特の甘えがあるのだ。おもしろいことに、そういう6種にひきつけられる異性がいる。特に9種とか10種がひきつけられるらしい。

6種の男は、親しい者ほど裏切る。自分の愛が募るほど、愛する女性にわざと冷たくあたり、それでもついてくるかどうか確認しようとする傾向がある。太宰治は愛人と心中したが、おそらく妻の気を引きたかったのだろう。

死ぬなら自分一人で死ねばいいものを、わざわざ道連れを探して死んでいる。実は太宰は生涯を通じて5回も自殺を試みている。そのうち3回が心中だった。

最初の自殺未遂でも、心中相手はのちに妻となる恋人ではなく、3回しか会ったことのないカフェの女だった。二人は熱海の夜の海に飛び込んだのだが、女が苦しんで太宰にしがみつくと、太宰は女を蹴飛ばした。女は死んだが、自分は生き残った。

私は中学生のとき国語の教科書に載っていた太宰の『走れメロス』を読んで爽快な気分になったが、この小説ができた背景を聞くと素直にそうは思えなくなった。

太宰はたいへんな借金を重ねていた。ところが、友人の壇一雄が太宰の妻から預かった金を熱海の宿屋に届けにくると、壇とともに遊興に使い果たしてしまう。

宿屋に未払いの金があるので、壇を残して太宰は東京に借財しに行く。だが、壇が待てども待てども、太宰は帰ってこない。壇は心配になってきたので、宿屋の許可を得て井伏鱒二の家に様子を見に行くと、太宰はのんきに将棋をさしていた。

壇が怒ると、太宰はこう言いわけした。

「待つ身が辛いかね、待たせる身が辛いかね」

これが有名な「熱海事件」で、のちの『走れメロス』を書くきっかけになったというのだ。今まで散々面倒をかけてきた井伏に、借金の申し出のタイミングがつかめずにいたらしいが、夢想と現実のギャップのなんと大きなことよ。

ショパン

ポーランド人には6種が多いそうだ。ポーランド出身のショパンも6種である。ショパンの音楽の華麗さはどうだ。あれこそ6種の音楽である。

ショパンは青年期に結核になり30代で亡くなっているが、彼も革命に熱中した一人だった。6種のショパンは、自分で戦うことはもちろんなかった。

ショパンは社交界の人気者だったが、交際範囲は狭いものであったという。演奏においても、彼は20人とか30人といった小規模なコンサートを好んだという。

世間的なつきあいが狭いため、6種はパートナーの女性に頼るようになる。ショパンの場合は、ジョルジュ・サンドという愛人がいた。この人がすごい傑物なのだが、これはまた別の機会に取り上げよう。

7 捻れ型 7種

7種の体型

捻れ型というのは、腰椎3番に重心がかかる体癖である。ここは捻れ運動を支配する。臓器的には泌尿器を支配する。

捻れ型というぐらいであるから、7種は体が捻れやすいという特徴がある。何かに夢中になると捻れてくる。左肩が後ろにいくように上半身を捻る。

このような姿勢をとると泌尿器が働き、尿意をもよおすようになる。つまり、この姿勢は小便をこらえている態勢なのである。そこで、7種は緊張すると尿意をもよおす。

7種は、試験が始まりそうになるとトイレに行きたくなる。また、ヨーイドンでピストルが鳴りそうになると、もよおしてしまう。

7種の男は非常に男っぽい。眉毛は太く、声は太く、毛深い。村田英雄や野球の江夏豊投手などはこのタイプである。

また、7種は汗っかきである。よだれがとて多いのも特徴である。話に夢中になってくると、口からつばを飛ばして話す。「口角泡を飛ばす」とは7種のことだ。つまり、新陳代謝が抜きんでて活発なのである。

彼らの胸板は厚く、胴が太く、声がよい。イタリア人にはこのタイプが多いのだが、そういう体でなければ、オペラ歌手のような声は出せない。村田英雄のような演歌歌手ならいざ知らず、胸が薄く死に物狂いで喉から声を絞りだしている日本のポピュラー歌手では、とてもあのような迫力が出せない。

女性の7種は男っぽい感じがする。戸川昌子のような人が代表である。

捻れ型を見分けるひとつの方法として、足裏の状態を見るのがある。捻れ型は片方の足が扁平足である。両足が扁平足の人には捻れではない。

7種の体は泌尿器と循環器との関係が深い。そのため、死因は脳溢血か心臓病が圧倒的に多い。11月から月にかけて脳溢血で倒れる人は捻れ型が圧倒的に多い。

7種の感受性

7種は兵隊として生まれてきたのだろうか、いつも闘争をしている。戦うとき、人は体を捻って半身になるが、いつでもこの状態にあるのが7種だということである。

タオルを捻るとタオルは強くなるが、人間も同じである。つまり、捻る行為というのは、自分の能力以上がんばろうとしている姿なのである。

捻れ型がよく使う言葉は「勝負を度外視してやろう」である。だが、本音は逆だ。だからこそ、そう言うのだ。

7種は弱い者に対してはものすごく強く出る。上に対してはへつらうが、目下に対しては非常に手荒く扱う。「強きを助け、弱きを挫く」なのである。

もっとも、弱い者が「あなたにはかないません」と頭を下げてくると、子分にしてお抱え込んでしまうが。

7種は、どんなことでもいちばんになろうとがんばる。旅行で電車を選ぶときは、必ず特急電車を選ぶ。途中でほかの電車に追い越されることがないように、時刻表をよく調べる者すらいる。

電車に乗るときは、誰よりも先に来て待っている。5種が時間ぎりぎりに来るのは好対照だ。5種は時間までケチなのだ。

旅先では、7種はいちばん先に風呂に入る。まだ誰も入っていないから湯はとても熱いが、水を入れて温めるようなことはせず、じっと耐える。そして、最後まで風呂に残る。

宴会で酒を飲めば、酒飲みのライバルに負けまいとして、二日酔いの薬を飲みながらも酒を飲む。

敵に勝つためならば努力を惜しまないのが7種だ。彼らは敵がいれば努力できる。そういう点では、たいへんな向上心の持ち主なのである。

捻れ型は、最近はあまりはやらない。汗臭いから特に女性に人気がない。はやっているのは前後型タイプだ。だから、小泉さんが女性から好かれるのだ。

昔の政治家には捻れ型が多かったようだ。吉田茂がその典型だが、だんだんそういうタイプは少なくなっているような気がする。

闘士は常に闘争を求めるが、管理社会においては、格闘技家になるか機動隊にでも入るしかない。あるいは、ビジネスで成功するなら、ゼロからスタートする立身出世型だろう。

誇張癖

捻れ型には誇大表現がつきものである。昨日釣った魚が、はじめの話では20センチだったのが、今日は50センチになるという具合に、どんどんオーバーになっていく。

なぜこのようなことになるのか。それは、自分の実感の大きさを量で表現したいがためである。魚の大きさではなく、喜びが大きいということを示したいのである。

7種が表現する「量」とは、物理的な大きさではなく、嬉しさの実感なのである。肉感的興奮を量で表現したいのである。6種の場合、大風呂敷は架空のものであるが、7種の大風呂敷には実態がある。

実際、捻れ型には量がつきものだ。世界一長い小説とされる『大菩薩峠』は、捻れ型の中里介山の作品である。

捻れ型のリーダーは、部下に分厚い報告書を求める。分厚ければ分厚いほど評価する。料理も山盛りでないとつまらない。とにかくボリュームというか量感に快感があるのだ。

それから誇大表現のなかには、「おまえには、こんな体験はないだろう」といった、まれなる体験が含まれることもある。この、まれなる体験も、また興奮を表現したいものであり、自らの優位性を示したいがためなのであろう。

このあたりを知っておかないと、7種を大ぼら吹きだと誤解してしまう。

捻れ型の勝負

以下は、今東光の昭和48年の文章をもとに書いたものである。出典は調べたがわからなかった。

新国劇で中里介山の『大菩薩峠』をやったところ、2種の久保田万太郎が「あんな講談にもならないものを戯曲化して木戸銭をとるなんて詐欺だ」とぼろくそに批評した。2種はときに批判がきつすぎるきらいがある。

すると、捻れ型の中里介山から久保田万太郎のところへ血で書かれた果たし状が届いた。気の小さい久保田万太郎は震えてしまった。

そこで、久保田が誰に相談しにいったかというところ、相手が悪かった、芥川龍之介だ。

芥川はこう言ったそうだ。

「きみ、これはやむをえん。男だから受けなくちゃいけない。潔く受けなさい。そのかわり介添えは、私が今東光に頼みましょう。そしてあなたの骨を拾うのは今東光。負けたら、その場で中里介山を打ちとめてもらいましょう」

この突き放したようなものの言いはどうだ。ふつうなら「おれが誰かいい人に頼んで、なんとか丸くおさめてもらおう」とでも言いそうなものだろう。上下型の芥川に相談するからこうなる。

このあとの今東光の話がおかしい。

「それで、そのお使いに藤澤清造と岡栄一郎が来た。要するに、久保万は必ず負ける。だから、久保万がちょっとでも切られたら、『勝負あった』と割って入り、それでも介山がやめないようなら、『卑怯なり』とかなんとか言って、介山をたたっ斬ってくれっていうんだ。むちゃな話だよな、ほんとに。でも、おれとしたら、引き受けざるをえないと思っていた」

久保田がたずねたとき、今東光は真剣を振りまわしていたという。一方、介山は、このころ山奥で剣を振りまわし、ピストルを撃つ練習をしていた。

それにしても、「引き受けざるをえない」と言う今東光も今東光だ。ちなみに、今東光も介山同様大捻れである。

幸い、久保田はなんとか決闘をしないですませることができたようだ。それにしてもすごい時代だった。細腕文士でもこれくらいだったのだから。

向上心をいかに発揮させるか

捻れ型は、自分と誰かを比べ、その誰かに比べて何らかの点で自分がすぐれていると思えば満足する。

よき敵がいれば7種は元気だ。敵がいるときは向上心が発揮される。7種は、自分の元気を呼び起こすために敵を次から次へとつくりだす。心には常に仮想の敵やライバルがいる。

「あいつには絶対に勝つ」とか「あいつだけには負けたくない」というように、常に具体的な対象がある。

ただ、これが過ぎると、敵を憎むようになる。醜い手段を労してまで相手を蹴落とそうとする。

そこで、7種は、過去の偉人や、遠くにいてなかなか接触できない海外在住の人物などを目標にするのがよいとされる。

捻れ型の子供を教育するときも、昔の偉人の話を聞かせるのがよい。「この人はこんなに努力して偉くなった」とか、「こんなに一生懸命やって偉くなった」と話すと、捻れ型の子供は自分も負けまいと発奮し努力する。

そういう対象を相手にして、追いつき追い越せと努力する7種の向上心はなかなか魅力的である。

体感重視の7種

7種は行動的だが、衝動的に動く。5種も行動的だが、行動には常に計算がつきまとう。それに比べて、7種には計算がなく、ほとんど衝動である。

たとえば、彼らは無理な仕事を客から頼まれてもイヤとはいえ、衝動的に「できます」と言ってしまう。

できないと言うのは、負けたような気がするからだろう。そのため、言ったあと必ず後悔する。ただ、彼らはたいへんな努力家なので、必死で自分の言葉を守ろうとする。

衝動的というのはあまりよい意味には使われないが、決断というのは衝動的でないとできない。

物事には常にメリットとデメリットがあるから、頭でいくら善悪を考えても決断できないものなのだ。その点、7種の決断力はたいしたものといえる。

ただ、7種は衝動で行動するため、失敗して痛い眼にあうことがよくある。

7種は衝動で動くため、予測ということができない。失敗して、そのとき体で痛みを感じ、そこでようやく7種は悟る。7種は結局体でしか感じられないのである。

そこで、7種は、戦って勝つためには机上の空論では意味がないと考えるようになる。肌で感じた戦術、実践で鍛えた戦術以外には信じようとしなない。

教育方針もそうなる。7種の親の場合、子供に対する教育はもっぱら体感教育となる。悪いことをしたら、すぐ体罰だ。体で覚えなければダメだと思っているのだ。

7種に劣等感が芽生えるとき

7種は闘病が下手だ。隣のベッドの人間と張り合うのは得意だが、自分の弱さや老いを感じると体が捻れなくなる。そうなると、体重は落ち、やせこけ、上下型のようにになってしまう。一方、自然に老いを敵にした場合には、7種は丸くなってくる。自然には逆らえないからである。

あいつより自分のほうが劣っていると実感してしまうと、7種は弱い自分自身が敵になる。すると、7種は極端にもろくなり、急速に体力が衰える。努力に努力を重ねてきた人間だけに、一度劣等感が芽生えるとダメージが大きいのだ。

以下は有名なエピソードだ。

風呂場を直す仕事を請け負っていた工務店の棟梁がいた。彼は捻れ型であった。このとき、同時に仕事に入ったのが9種のタイル屋であった。

このタイル屋はたいへんな集注力の持ち主で、完璧主義者の職人であった。なにしろ、9階建てビルのタイルを一人で貼った職人なのだ。人に仕事を任せられない人間だった。

工事最後の日、二人そろって仕事をした。棟梁はタイル貼りの仕事を手伝うと言ってタイルを貼りはじめた。タイル屋はそれを苦々しく見ていた。

下のほうを貼り終わり、壁に移っていったときである。腰に突っ込んでいた棟梁の金槌がポロッと下に落ち、貼り終わったタイルがバーンと割れた。

そのとき9種のタイル職人がすかさず言った。

「てめえ、それでも大工か。大工の魂を落っことしやがって」

その日から大工の棟梁は顔が浮腫んでしまい、二度と現場に戻れなかったという。

好意で手伝おうとしたのであるから、9種のタイル屋もそこまで言わなくてもと思うが、こういうのが9種なのだ。核心をずばっと突くのである。急処を突かれた捻れ型の棟梁は二度と立ち直れなかった。

竹を割ったような性格だが

7種は「へそ曲がり」と呼ばれることが多い。へそ曲がりというとねじけた性格のように思いがちだが、本当は竹を割ったようなさっぱりした性格なのである。ただ、下手に競争意識をもたれてへそが曲がりだすと扱いにとっても苦勞する。

だから、彼らを決して敵にまわしてはいけない。敵にまわしたら恐ろしい敵になる。そのかわり、味方にすれば、これほど頼もしい人間もいない。

このタイプを扱うには、言葉を選んで対処しなければならない。ともかく、彼らには褒めまくることがよい。そうやって、相手の懐に飛び込むのである。

「これはあなたにしか頼めないんだ、頼む！」

こういう言い方をして頭を下げれば、大喜びで力になってくれるだろう。また、意見が合わない捻れ型が反発してきても、彼らの努力をたたえることがよい。

「きみの言うことは認められない。しかし、面と向かって私にこのような批判を言えるのはきみだけだ。たいしたものだ」

捻れ型が反発したり挑発したりするのは、形勢が悪いと思っているからである。そこで、彼を勝てるように加勢してやればよいのである。こうすれば、彼らは反発しながらもついてくる。

8 捻れ型 8 種

8 種の体型

8種は体が弛むと捻れてくる。そして腰だけが捻れ、上半身は捻れない。7種のように片側の肩が前に出ず、そのかわり恥骨が前に出てしまう。30歳から40歳ころよりおなかが出てくる。そして、恥骨が前に出て、体が後ろにそるようになる。

8種は見た感じが丸い。3種が混じったような感じである。だから、強い感じがしない。これに対して7種は四角い感じで、5種のように見える。

8種は腎臓の動きが鈍い。精神的ショックがあると、すぐに腎臓が不調になる。小便の具合ですぐわかる。

7種の小便は早い、8種の小便は漏れるようなたれるような、ぼたぼたしたキレの悪い小便で、必ず途中で二、三度中休みがある。そのため、必要以上に腰を振らなければならない。

野球選手に8種は多いという。バッターボックスに立って構えたとき、お尻をプリプリ振りまわしたら8種と思えばいい。

トイレでは、ふつうの人より三倍は時間がかかるから、急いでいたり、トイレの順番を待ったりするときは、8種の後ろには並ばないことだ。

また、7種は緊張するとすぐ尿意をもよおすが、8種は尿が出なくなる。それを緩和するため大汗をかくが、それは脂汗でべとべととしている。

8種は腎臓が怠けやすいため、血液の浄化作用を大腸が肩代わりする。そのため、すぐに下痢をする。下痢をすることで毒を排泄するのである。

8種は尿意をもよおしても我慢していると尿意を失う。しかし、排便のほうは決して我慢できない。

8種がいちばん困るのが便秘である。便秘すると排泄機能が損なわれるため、体が少しずつ浮腫んでくる。とりわけ顔にそれがいちばん表れる。顔がぐちゃぐちゃになる。

8種にとって、最後の砦は肝臓である。肝臓がやられると、コレステロールがたまり、血管が硬化し、高血圧、心不全、肺気腫などになる。

7種の病気はだいたい泌尿器系の病気で、激しい痛みを伴う。痛風、膀胱炎、膀胱結石、くも膜下出血などである。これに対して8種は、何も痛まない病気が多い。糖尿病、痛みのない脳血栓、黄だんなどである。

痛みが出ないため、元気がない割には病気がないと思われがちであるが、それは病気に鈍感なためで、あるときドカッと心臓や頭にくる。7種が脳出血で死ぬのに対し、8種は脳血栓で死ぬことが多い。

8種の体は外から見ると固くがっしりとして見えるが、皮膚は弛み、肋骨はカチカチで、肉はぶよぶよしている。水太りということだ。8種は色がとても白い。

8種の感受性

8種は、きわめて理知的に計画をつくることができる。そしてなにかと理屈っぽい。どこかの野球球団で名監督と呼ばれている人を思い浮かべればよい。

計算がとてもよくできる頭があり、それが勝負に向かっていくのが8種である。自分が勝てると思うと体が捻れてくる。

8種は勝算があるときだけ戦う。7種も勝算については非常に賢く、勝算がないとなればけして戦わない。ただし、ちょっと努力すれば勝てそうな相手に対しては戦いをいどむ。一方、8種は、絶対に勝てると思える相手としか戦わない。

8種は勝てそうもないと思った相手には、人前でも平気で土下座する。7種は自分より強い相手がいるほどがんばるのだが、8種はそれとは好対照である。

7種はいつも勝ちたい、一番でいたいと願うが、8種は完全勝利を得ようとはしない。8種は一番乗りして電車を待ったりはしない。一番になれば、あるいは勝てば、追われる立場になる。それがイヤなのだ。そこで、8種は負けまいとは思っても、二番でいたいと思う。

7種が出藍の誉れを願い、師匠を抜くことを常に考えているのに対し、8種は師匠を抜こうとは絶対に思わない。

そもそも8種は一番弟子にはなりたいが、師匠にはなりたがらないのである。全責任を負う立場は避けたがる。それゆえ、8種は番頭に向いているといわれる。

8種は主人に忠実な番頭になる。そういえば、少し前、自分のことを「偉大なるイエスマン」だと自慢していた某政党の幹事長がいた。

8種は自分が尊敬する人間がつくる規律に忠実に従う。目下の者のいうことは聞かない。心から崇拜できる人間を常に捜している。

義理、人情の8種

8種の忍耐力は全体癖中いちばんである。敵に対して7種が我慢できずに敵意を表すときでも、8種はあくまで静かである。

しかし、それができるのは実は鈍いためだからである。たとえ環境が厳しくても、そういうことに鈍感だから耐えられるのだ。

8種は自分の弱さを克服するためにたいへんな努力をする。とにかく根気がいい。ほかの人なら音をあげるような単調作業をこつこつこなしていく。勤勉な努力家とは8種のことである。

努力についていえば、7種は得たものは全部自分の努力の結果だと思っている。努力しなければ成果は得られないと思っている。ところが、8種は努力しないで得たものに対して感謝する気持ちがある。

運や縁を感謝する8種は、義理や人情をととても大事にする。約束を守り、恩義にあついのが彼らの特徴である。彼らは義理、人情、浪花節をたいへん好む。この言葉をしょっちゅう口にしたら、この感受性傾向があると考えてまず間違いないだろう。それが、8種の最高の美徳である。

9 開閉型 9 種

9 種の体型

開閉型は腰椎 4 番に重心がかかるタイプである。腰椎 4 番は運動機能としては骨盤の開閉運動を支配する。また、臓器的には生殖器を支配する。

9 種は小柄な人が多く、非常に集注力が強い。また、偏屈で頑固なところがある。

9 種の見かけは小さいのに、着物を脱ぐと筋肉がついて立派な体をしている。女性はトランジスター・グラマーだ（いまでは死語だろうか?）。なお、西洋人では大柄な人のなかにも 9 種がいるそうだ。

9 種の顔は小さく、パーツが全部中心に寄っている。それと、股関節から膝までが長いのも特徴である。そのぶん、膝から下がとても短い。

それから、腰のそりが非常に強く、そのため尻がホッテントットのように出ている。

足の親指に力が入るのも特徴だ。そこで、靴底を見ると、9 種の靴は前側の親指側がへっている。ほとんどの人は靴の外側や後ろ側がへっているのに、9 種のへり方はちょっと特殊だといえるかもしれない。これは、骨盤を閉じる運動（縮みの運動）が得意だからだ。

骨盤の閉運動とは聞き慣れない言葉であろうが、たとえばタクシーに乗るとき体をかがめて乗る動作がそれだ。この運動がサッとできずに、車の天井に頭をぶつけてしまうのは老化現象である。

そうそう、骨盤を閉める代表的な動作として、しゃがみ姿勢を忘れるわけにはいかない。

9種は踵を床につけたまましゃがむことができる。9種にとってはしゃがんでいる姿勢がとても楽なので、和式トイレで考えごとをするのが好きだ。

それから、正座も骨盤を閉める姿勢であり、強い緊張姿勢である。9種はいつでも正座している。

軽量級の重量挙げ選手には9種が多い。オリンピックメダリストの三宅兄弟は9種だ。彼らは腕力はないが骨盤を縮めて持ち上げようとする。

競馬の騎手にも9種が多い。

なお、純粹の9種ではないが、2種や6種に9種の混じっている人はけっこういるそうだ。昔の力士であるが、千代の富士には9種が混じっているという。前みつをつかんで拝むような姿で前に出る相撲は、9種的だという。

9種の運動特性

人間というのはおもしろいもので、咄嗟のときに自分の癖が出る。9種はびっくりすると、思わず縮んだりしゃがみ込んだりする。ところが、上下型は直立不動で伸びてしまう。

骨盤が閉まっている状態とは緊張の姿勢である。9種はこの状態がとても好きなので、そういう状態になりやすい職業を選ぶ。よくあるのがとび職である。

とび職は高いところで、狭い板の上をとことこ歩いて仕事をする。下半身が安定していないと、この仕事はできない。また、こういう緊張感を9種は好むのである。

9種は股関節がこわばりやすく弛みにくい。そのため、仰向けに寝ると股を開けないことがある。歩いても歩幅が小さく、チョコチョコ歩く。

9種は年をとるごとに縮んで小さくなる。ただし、やせていても体力はあり、衰えることがない。ちなみに、人間は年をとればだいたい小さくなるものなのであるが、上下型だけは例外で、年をとるごとに背が伸びる。

人間には固有の速度があるが、9種は全体癖のなかで、もっとも速度が速い。もっとも遅いのは上下型。電車の席をとらせたら、9種はサッと行ってとってしまう。決断の早さも頭抜けている。

逆に、9種はゆっくりしゃべると、自分がどこまでしゃべったか、わからなくなるといふ。

9種の代表的人物には、全体の創始者である野口晴哉がいる。合気道の植芝盛平も9種であったという。ほかに、川端康成、水戸黄門の西村晃などがある。

女性ではミヤコ蝶々、岸田今日子あたりがそう。奈良岡朋子さんも9種傾向があるだろう。ちょっとねっちょりした感じがする。

9種の感受性

骨盤の運動というのは、生殖器の働きと密接な関係がある。したがって、9種は生殖器が非常に強い。80過ぎのお婆さんでも、卵巣はピカピカなのだそう。生殖器の働きとの関係から、9種は愛憎に非常に敏感な感受性をもつようになる。

9種の行動には、愛情や憎しみといった心が背景にあり、しかもその心がひとつの対象に注がれるという特徴がある。

9種の親の場合、子供が何人かいると、いちばん好きな子供がいる。子供を平等には愛せず、えこひいきするのである。もちろんそれを隠しているわけだが、子供にはそれがわかる。

9種の親に徹底的にかわいがられた子は、自立ができなくなる。9種の独占欲が子供を手放そうとしないからである。

子供が何かしようとする、9種はきわめて勘がよいので、すぐに察知して、「ハイ、おまえはこれが欲しいのね」などとサッと用意してしまう。その結果、子供は独立の欲求が抜け、腰抜けになる。

一方、排除された子供は徹底的に強い子供になる。それも弊害があるだろう。

9種の奥さんをもらうと、なにごとにも完璧にこなす。きちんと片づいている。しかし、亭主は注がれる愛情がだんだん息苦しくなってくる。なかには「賢い女房をもらうと男は重荷だ。女は素直で少し抜けているくらいがいい」と言い出す男もいる。

9種の奥さんをもつ男が浮気をしたら、激しい嫉妬心によって呪い殺されることを覚悟したほうがいい。9種の嫉妬心はほとんど凶器である。

9種がいったん憎むようになると、何十年でも憎しみを抱え込む。わら人形に釘を打ち込むことを職業にしているような人間は、だいたい9種のお婆さんを想像すればよいという。それくらい執念深いということだ。

格の高い9種は、自分の独占欲や執着心をよく自覚し、できるだけ相手から距離をおいて相手を見守るようになる。そのあたり、同じ体癖でも格の違いというものがある。

眼の力

9種にギロリと睨みつけられると、恐ろしくて固まってしまいそうになる。眼に独特の凝集感がある。

川端康成が寝ている部屋に、泥棒が侵入したことがあった。異様な気配を感じた川端がぼっと目をあけると、枕元にいた泥棒が川端を見下ろしている。

それから一分間、川端と泥棒は見つめ合い無言の時間を過ごしたが、ついに泥棒が「ダメですか」と口を開き、一目散に逃げ出した。

あの眼で睨まれたら、私でも逃げ出すだろう。それくらい9種の眼は怖い。捻れ型が怒ったときの眼も怖い、質がちょっと違う。見たことのない人にはわからないのが残念だ。

それと9種はいくらでも黙ってられる。相手が眼の前にいようが、黙っていることは全然苦にならない。

完全を求める9種

9種はたぐいまれなる集注力をもつが、その背景には激しい性エネルギーがある。9種の激しい集注力は、性欲の力を借りた力なのだ。9種は新しいものをつくりたがるが、これも性エネルギーの分散活動といえるのである。その激しい集注が9種の完全主義者をつくる。

薬師寺を再建したのは、有名な宮大工の棟梁・西岡常一だが、彼は西塔を復元したとき、残っていた東塔よりも十数センチ高くつくった。二百年後に同じ高さになるのだと西岡は言っていた。

こういう話を聞くと、あいた口がふさがらなくなる。

9種の集注力は単に強いだけでなく、持続時間がなみはずれて長い。そこで、集注力を要する仕事をする職人たちに、そのようなタイプがよく見られることになる。

ところで、職人のイメージとはどんなものであろうか。

- ・仕事一途でほかのことにはいっさい関心がない。
- ・仕事はできるが、仏頂づらで愛想というものを知らない。
- ・口がひどく悪く、気に入らない相手だとぼろくそに言う。
- ・わざと、人の意見や忠告に逆らう天の邪鬼である。
- ・儲けよりも仕事の出来を気にする。
- ・勘がすべてで、勘の悪い人間をバカにし、やたらと凝る。
- ・一匹狼で偏屈でどうしようもないが、仕事となると頼まざるをえない

彼らが、独断と偏見の人物と称されるゆえんがおわかりだろう。

日本の文化は縮みの文化であるといわれるが、それは9種の特徴が反映されているからだ。細かいところまで気を配って、緻密につくられる日本の伝統的工芸品は、そういう特徴がいかんなく発揮されている。

命がけの集注

将棋をしていて、7種は形勢がよくなるほど調子が出てくるが、9種は形勢が悪くなったほうが力が出る。形勢がよいとかえってポカが出る。

9種は状況が悪いときほど力を発揮する。というより順境は苦痛なのではないだろうか。ふつうの人間なら失意のとき、9種は爆発的エネルギーを発揮させる。

逆境のさいたるものは、命がけの状況であろう。そういうとき、9種は特に力を発揮する。先ほど述べたとび職のように、高いところで仕事をするのが得意なものそのためである。

なにごとにも命がけでやるので、9種に気楽にものを頼むと猛烈に怒る。どうしてそんなことまで、へとへとになってやるのかと、ふつうの人は思う。

また、5種のようにふたつのことを並行して行うことができない。命がけの集注を行うので、ご飯と焼き海苔をいっしょに食べることもできないらしい。

乱世において頭角を現すのも、命がけの状況を好むからである。こういうとき、9種は革命家や参謀として活躍する。

たいていの政治家はこんなときは逃げ出してしまい、9種しか残らないのである。だから、9種が政治舞台に登場したら危ない時代といえる。代表的人物には、ナポレオンやヒトラーがいる。

日本人に眼を向ければ、日露戦争で日本海海戦の作戦を立案し、日本を勝利に導いた連合艦隊参謀の秋山真之《さねゆき》がこのタイプである。また、幕末の官軍総司令官・大村益次郎もこのタイプである。

満たされることへの不安

ある対象に対して集注する——興味をおぼえ意識を集める——と、9種は快を感じる。そして、9種はとことん命がけで集注する。これが「完全を求める」ことに通じるのである。

完全主義というのは、要するに自分の集注要求に妥協できないということなのだ。9種は、命がけで自分の全てをぶっつけて「完全」を求めていく。ただ、これには問題がある。実は、完全に達したら困るのである。

いくら集注しても結末がないから必死で集注できるのであり、満たされないものがあるからこそ集注できるのだ。もし完全が実現してしまえば、要求自体がなくなってしまう。そうなれば、それ以上先はない。

そのため、9種は完全を求めながら、完全が実現することを恐れるという奇妙な心をもつようになる。つまり、9種の完全を求める行動の背後には常に「満たされることへの不安」があるのだ。

9種の病人は扱いつらいとされるが、それは9種が完全を恐れるためである。病気すら9種にとっては集注の対象であり、病気が治ることは満たされることになるのだ。そのため、9種は治ることに不安をいだいてしまう。

9種の直観力

9種は生まれながらに直観がすぐれている。親が何か小言を言いそうになると、それを察知してしまう。この勘は触覚から生まれる。9種は触覚がきわめてすぐれているのである。

触覚というのはその場で触れる感覚である。これに対して、視覚というのは、対象物に自分が触れていない。そこで、視覚には予見性が生じる。ところが、対象と接する触覚には予見性は生じない。したがって、触覚のすぐれている9種には、予見性は見られない。

9種は、明日を予知、予想するようなことをしない。9種は自分の勘に基づいて、いまだけを判断する。明日は明日になって考えればよいという態度なのだ。実際、9種は勘が鋭いので、なまじ深く考えないほうがよい判断ができる。

9種が洋服を選ぶときは、肌触りをとても重視する。その点、上下型とか5種は肌触りは関係なく、色やデザインで買う。

触覚はあくまで自分の感覚であるから、9種は自分の体験しか信じない。会社経営でも、9種の社長は一人で何でもやってしまう。だから、規模は大きくならない。

勘の鋭い9種は人の心を直観的に察することができる。そこで、9種にプレゼントするときは、気をつけなければならない。

どんな粗末なものでも、相手の心がこもったものなら喜ぶが、そうでなければたとえ高価なものでもまったく評価しない。私だったら、心がこもっていろいろいいが、喜んでいただくのだが.....。

動物的直観がすぐれているため、9種は知性をほとんど重視しない。大脳が必要ないと悪口を言う人もいる。ということで、もっともぼけやすいのが9種体癖だという。ぼけても勘がよいから十分生きていけるのだそうだ。

10 開閉型10種

10種の体型

10種は若いときは上下型かと思間違ふほど細いが、子供を産むたびに太る。10種はあまり食べないが太ってしまうのである。

10種は開型とも呼ばれていて、骨盤の開く速度がたいへん速い。後ろから見ると尻は広いが、横から見ると尻は薄い。9種の出っ尻とは正反対である。

尻が広く薄いと、ふつうは足首が広がるものだが、10種は足首が細くしまっている。体は非常に太っているにもかかわらず、足首はきゅっとしまっている。

10種にとっては骨盤の閉まりすぎがいちばん体によくない。骨盤を開く力がなくなると、体がぶよぶよになる。

10種は骨盤が開くと元気になる。もともと骨盤が開いているタイプなのに、さらにいっそう開かないと具合が悪くなる。

ふつうの人は骨盤が閉まると性欲が活発になるが、10種はそうなっても活発にならず、骨盤が開かないと性欲が活発に生じない。

骨盤が開こうにも開けず、閉じようにも閉じることができない状態になると、不妊になりやすい。10種には不妊が多い。子供をつくるより育てるのに向いている体のようなのである。

10種の感受性

10種は未熟な者、弱き者に愛情がわき、助けようとする。そのため、体力のなくなっている病人にはもっともふさわしい看護人となる。ところが、少しでも元気になってきた人間は、この看護を暑苦しく感じだす。

10種は子供をとてもうまく育てる。しかし、思春期になっても赤ちゃんにしか見えないのが欠点だ。自立する力のある人間は、やがて10種から去る。

同じ開閉型に属する9種も愛情深いのであるが、9種がひとつの対象に愛情が集中するのに対して、10種はどんどん分散するのが特徴である。つまり、多くの者を愛し、なかでも弱い者を抱え込むという傾向が強くなる。非常に母性的といえる。

母親はどんなに子供がダメな人間でも、その子を愛する。いや、傷ついたり、弱ったりしている子供ほど深い愛情を注ぐ。母性とはそういうものなのだろう。

猫をたくさん飼っている一人暮らしのお婆さんをとときどき見かけるが、このお婆さんにとってほどの猫もかわいい。しかも、どの猫も足が折れていたり、眼がつぶれていたり、弱いところがある。そういうお婆さんがいたら、まず間違いなくこのタイプである。

このように10種は愛情が深いのだが、その愛情は、自分の子供に接するような愛情なのである。亭主をたてて上手に暮らしているが、亭主を男として優遇しているのではなくて、自分の子供として、あるいは持ち物として大事にしているのだ。

寛容な態度の10種

10種は元来どんな人でも受け入れてくれる。懐に飛び込んできたら、どんなぐれた人間でも受け入れてくれる。いや、ダメなヤツほどかわいい。

ただし、人を受け入れる前はかなり慎重である。最初はじっくり見定めようとする。裏切る人間か、恩を感じる人間かを見定めようとする。そして、ひとたび受け入れれば、徹底的に面倒を見る。

彼らを友人にもてば、困ったとき親身になって助けてくれる。その点、まったく当てにならない上下型とは違う。

とにかく「頼られている」感じが10種には快感となる。しかもその対象が大勢なほど快く感じる。逆に、頼っていた人が去っていくことほど10種が絶望を感じることはない。10種が病気になるのは、そういうときである。

鷹揚な10種

10種の行動は鷹揚で、ゆったりして見える。実際、彼らはとても鷹揚な精神の持ち主である。9種はその点、ややこすっからいところがある。

京都の気風は9種的である。言葉の裏を察せよという態度だ。たとえば、主人から「お茶でもどうぞ」と言われたら、そろそろ帰らなければいけないと察しなければいけない。これは9種的な感覚である。

その点、10種は鷹揚だ。「お気楽にしてください」と言われたら、ズボンを脱いでも大丈夫だ。

野口晴哉によると、彼は戦争中、コーヒーを飲みたくなると10種の家についてごちそうになっていたという。

物資が不足してきて、コーヒー豆が手に入りにくいにもかかわらず、たずねると貴重なコーヒーを煎って気前よく飲ませてくれたという。

その人はご亭主に「コーヒーを煎ってくれ」と言われて、はじめてコーヒーがなくなったのに気がついたそうだ。

そういう具合に、10種にはどこか間の抜けたのんびりしたところがある。家人をさしおいて最後の一杯をごちそうになったことをあとで知り、野口はたいへん感謝したという。

大衆に働きかける力のある10種

意外にも10種は計算能力や事務能力にすぐれているのだそう。それから、面倒をみたがる感受性をもつ10種であるから、彼らには人の役にたつことをやらせると非常によいという。

10種に仕事上のアドバイスを与えるときは、どうすれば彼（彼女）の仕事が、お客さんや社会のために役立てるかを考えさせることが肝要になる。

10種が芸術家になるとしたら、商業的、大衆的な分野で成功する。その理由も、ここからきているのだろう。

男性では、開高健が10種である。女性は、ラファエロの女性を見ればよい。カルデリーノの聖母をはじめとして、ラファエロの画く女性は10種ばかりである。

10種は弱い人間ほど大事にするが、その点6種との相性が抜群によいようである。ショパンは6種だが、彼の愛人、ジョルジュ・サンドは、いかにも10種的な人物である。彼女は、ショパンのことを、「自分の坊や」とショパンの母親宛ての手紙に書いている。

参考文献

野口晴哉『体癖一』（全生社、一九七一年）

野口晴哉『体癖二』（全生社、一九七九年）

野口晴哉『整体入門』（ちくま文庫、二〇〇二年）

『行動分析の手引』

佐藤直暁

発行日 2008年11月25日

改訂 2010年3月14日

改訂 2015年8月29日

発行者 佐藤直人

リーダー研究所 L研リーダースクール部門

URL: <http://lken-leader-school.com/>

MAIL: info@lken-leader-school.com

(C) 2015 Naoaki Sato

※ 本書の一部または全部を無断で複写・転載することは禁じられています。